

## 西村伊作を知っていますか

和歌山県出身の南方熊楠や、今回の西村伊作に共通するものは——優等生の枠におさまらない、どこか、輪っかが外れたような自由人的なスケールの大きさ、ではないだろうか。

「知の巨人」と称される南方熊楠(博物学者・民俗学者・「エコロジー」提唱の元祖etc.)の名が一般的に知られるようになって、まだ十数年に過ぎない。熊楠の膨大な業績の評価も、これからである。かつて、NHKのニュースでアナウンサーが、「ミナカタ」と読めなかったエピソードは今も時おり語られる。

本年2014年は、日本の近代住宅における先駆的な建築家であり、また、東京御茶ノ水に、芸術文化を重視し、彼の理想の教育を具現化するための学びの場、文化学院を創立した西村伊作(1884～1963)の生誕130周年にあたる。

彼が生まれ、43歳で東京に一家転住するまで過ごした和歌山県新宮市では、旧・西村家住宅(現・西村記念館)の築100年を記念したイベントが開かれ、建築史家の藤森照信東京大学名誉教授らが来新した。西村記念館は、自邸として、1914年に伊作が設計したもので、現在、国の重要文化財に指定されている。

伊作は、代々医師や教育家を輩出し、鉱山業等で豪商でもあった大石家に生まれた。父余平は、生活改善運動にも献身的に取り組む熱心なクリスチャンで、3人の息子に旧約聖書に登場する、伊作・眞子・七分(イサク・マルコ・スティーブ)という名を付けた。伊作は8歳で、母方の家名継承のため、奈良県下北山村の大山林家、西村家の養子となり家督を相続、西村家の戸主となった。

1911年の大逆事件で捕えられ、翌年、刑死した大石誠之助は、父の末弟で伊作の叔父である。誠之助は、米国で医学を学び、伊作が11歳の時に帰国、新宮で医院を開業し(貧しい患者には無料で)、また、人々の食生活・栄養改善をめざし、新宮初の洋食店「太平洋食堂」を開いた。多感な伊作少年は、誠之助から最新の欧米の生活文化や民主主義的思想を吸収し、その後の生き方に大きな影響を受けたといえる。

伊作は1909年、25歳の時、横浜からドイツ商船でイタリアに渡り、4ヶ月余、欧米を巡歴した。彼は1921年に文化学院を創立するが、この旅で、世界各地の様々な大学や教育施設を視察したという。

建築家としての伊作の「住宅改革」とは何か。一言で言えば、「客間を中心とした接客重視の家から、家族が過ごす居間と食堂を中心とした住い」へのシフトである。今では、ごく当たり前のことであるが、大正初期の封建的な気風の残る時代、大胆な発想の転換と実践であった。そしてその視点は、戦後日本の住宅建築の原型となった。

伊作は、新宮の自邸や軽井沢の別荘に与謝野鉄幹・晶子夫妻、陶芸家の富本憲吉、画家の石井柏亭ら芸術家を招き、地元の佐藤春夫や沖野岩三郎らも交えて、交流を深めていった。そして、伊作の長女が小学校を卒業、国家主義的で教師中心的な日本のどの女学校も気に入らなかった伊作は、娘のために自分の教育方針——自然で独自の人格を育み、芸術的な薫りのある人間を形成する教育をめざす、学校令に縛られない創造的な学校、文化学院を(ホテル用地にと取得していた)東京駿河台に創立した。

校舎は、伊作設計の英国のコテージ風、斬新さは話題を呼んだ(1923年の関東大震災で全焼したが、1997年に伊作の三男、八知が設立した軽井沢の「ル・ヴァン美術館」に復元されている。※ヴァンは風の意)。与謝野夫妻や川端康成、菊池寛、棟方志功、北原白秋、芥川龍之介、山田耕作ら多くの文化人が授業を行った。わが国のモダンアートを代表する村井正誠氏は一期生、米々 CLUBの石井竜也氏らも卒業生である。

与謝野晶子は、伊作について「稀にみる多能な人」と語り、佐藤春夫は、「何らの権威にも煩わされず、思う存分我が儘勝手に、そうして長生きをしたのがわが伊作さんである」と記している。(谷 奈々)